

舞踊作品の構造に関する研究

— 「雫の跡」の分析を中心に —

柴 真理子

〈はじめに〉

舞踊は動きを媒体とする表現であるが、その動きは一瞬一瞬に消滅するものであり作品を見終った時、観者に残るのは印象深い動き、それも演じられた順ではなく、断片的な動きでありながらそれらの動きが全体として一つにまとまり、つくり出されたイメージであろう。舞踊作品の各部分の動きが、それ自身の構造と表現性を持つことに関しては、「舞踊運動とその表現性に関する研究」で、舞踊運動をみえと実在の運動の両面からとらえる方法を用い、この方法の限界内において、一応の成果を得た。そこで次に、それ自身の構造と表現性をもつ舞踊運動を相互に関係づけて構造化し、舞踊作品として一つのイメージを出現させる要因について、各要因の働きがどのような運動現象を出現させ、どのような性格が感受されるかを、実証的な方法を用いて検証し、舞踊作品の表現構造の解明へと研究を進めたい。

〈研究目的〉

本研究は、舞踊作品の構造を探求するために、次の三点を実証的に明らかにしようとするものである。

1. 舞踊が“まとまり”として感受されるのは、どのような舞踊現象を呈する時か。
2. 舞踊の構成要因の働きは、どのような舞踊現象として現われているか。
3. 以上のような構造をもつ作品が、どのようなImageを出現させているか。

〈研究方法・研究対象〉

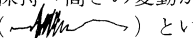
本研究では、社会的評価を受けたモダン・ダンスの作品「雫の跡」(choreographer…藤井公, dancer…本間祥公)を研究対象に選んで、8%、及び16% Filmに収録し、(1)choreographerへのインタビュー(2)Filmによる作品分析(3)鑑賞調査を行ない、作品の構造を実証的に分析した。

〈研究結果と考察〉

以上の方法で行なった作品構造の分析結果をまと

め、考察する。(図1参照)

(1) 舞踊の構造を支える内的基礎である身体各部の動きの構造は、

①頭の高さは「一定の高さを保持→高さの変動が激しい→高さが漸次変化する」(—)というpatternが反復されている。

②「ゆっくりと腕を挙げ、急速に振りおろす」「arabesqueから急にsplitになる」など、対比的な要素を持つ動きが連続して使われている。

③一種類の動きで移動をする動きの部分は少なく、arabesque, en l'air en avant, attitudeなどと連続して行い移動する動きが多い。そのために単位時間内の移動距離は少なく、個々の動きを見ているとposeの連続のようでありながら、実は徐々に移動しているという動きの流れがある。

④動きの水準の変動は、頭、腕、脚の高さの変動を複合したものであり、これが動きのdynamicsを生み出すと考えられる。

(紙面の都合により、一部省略)

以上のように、身体各部の動きに、反復、対比、移行、バランスなどの構成要因の存在をみることができた。

(2) 本作品には motif の動きが8つあるが、それらは座わる、立て膝、寝る、ブリエなど、その場でのゆっくりした動きが多く、脚部の動きがある motif でもその動きは歩・走など単純な動きである。そしてchoreographerのphrasingでは motif の動きを含む phrase と含まない phrase がほぼ交互に位置し、motifをつなぐ動きには、足を挙げながらの移動、turn、jumpなどがあり、motifの動きに比べてspeedがあり動きの水準の変動も激しい傾向がある。すなわち本作品では、単純で静かな動きがmotifであり、より複雑で激しい動きがmotifをつなぐという対比的要素をもつ構造である。

(3) choreographerは本作品を17にphrasingし、そのphraseをより上位のlevelで17→6→2というgroupにまとめ、他方、30%以上の鑑賞者に一致した区切れ目は19であり、そのうちchoreographerと鑑賞者の区切れ目が一致したのは7ヵ所であった。これらの区切れ目の特徴から、進行方向の変更点、移動を伴う動き→その場での動きへの移行点、体の向きの変更点は舞踊の中に“まとまり”を感じさせる性質を持ち、phrasingの手がかりになると言えよう。

(4) 本作品は前半と後半の“まとまり”を持つ。

①前半の動きは、ゆっくりと足を挙げながら移動する動きが多く、頭の高さの変化の振幅も狭く、腕はゆっくりと挙げてアクセントをつけて急激にふりおろす動きが多い。このような動きから成る前半に対して、鑑賞者は「暗い、重々しい、ぶきみな」Imageを持ち、前半の音楽からも同様なImageを持っている。

②後半の動きは、その場での動きが68.4%を占めるが、残りの移動を伴う動きでは前半には見られない

jumpが使われるなど、頭の高さの変動の振幅、回数共に多く、腕、脚の挙げおろしも speed をもって行われ、その場での動きと移動を伴う動きの対比が顕著である。このような動きから成る後半に対して、鑑賞者は「軽い、明るい」Image を持ち、後半の音楽についても同様の Image を持っている。

以上のように、作品の前半と後半について、動きの分析と鑑賞調査の結果を総括したが、作品全体の Image は「暗く沈んだ、重苦しい、神秘的、ぶきみ」であり、前半の印象が強い作品として受けとられている。

〈おわりに〉

さて、本研究では film 分析の結果と choreographer

の記述、及び鑑賞結果に多くの一致点がみられ、これらの結果から① 舞踊をみる者に“まとまり”を感じさせる要素② いくつかの構成要因の存在を確認し、舞踊作品の構造の一側面を実証できたと考える。しかし、今回の鑑賞者は舞踊経験が少ないので鑑賞者の年齢、舞踊経験を考慮して今回の結果を追試することが必要である。また作品構造の分析方法の開発が急務であり、それによる他の作品の分析を積み重ね、構成要因と舞踊現象の関係、更に作品の構造と Image の関係などを探求することが今後の課題であると考ええる。

図1. 作品の構造分析

